

ソクラテスの世界

目次

ソクラテスの世界

- 一、 ソクラテスの「哲学遍歴」(哲学の実践)
- 二、 ソクラテスの「知的遍歴」
- 三、 ソクラテスにとっての「知者」
- 四、 ソクラテスの「対話(吟味)活動」
- 五、 「正義」について
- 六、 『国家』編の主題は何か
- 七、 「正義と不正」

※ 参考文献

ソクラテスの「哲学遍歴」(哲学の実践)

ソクラテスの「哲学遍歴」(哲学の実践)

それは、まず、「デルポイの神託」により、「……ソクラテスより知恵のあるものはだれもない」ということを、友人のカイレポンから聞いた時から始まるわけである。

そして、それを聞いたソクラテスは、一体、何を神は言おうとしているのだろうか。一体、何の謎をかけているのだろうか。なぜなら、わたしは自分が、大にも小にも、知恵のある者なんかではないのだと自覚しているのだから。すると、そのわたしをいちばん知恵があると宣言することによって、一体、何を神は言おうとしているのだろうか？ その「神託の真意」(謎かけ)をぜひとも解明したいと思うわけである。そして、長いあいだ思い迷ったあと、やっとのことで、ある「考え」がふと思いつくことになるのである。そして、そのふと浮かんだ「考え」(思いつき)こそは、それ以前とそれ以後のソクラテスの人生を大きく変えてしまう決定的なものになるとともに、ソクラテスの「哲学遍歴」の第一歩ともなるものである。それでは、その「思いつき」とは、一体、どういうものだったかと問えば、それは、自分よりも「知恵のある人」を一人見つけ出しては、ほら、この人の方が自分よりも知恵があるじゃないかと、当の神託に反駁するため、という極めて簡単な理由からだったのである。それゆえ、ソクラテス自身、すぐにでも自分よりも「知恵のある人」を見つけ出せるだろうと思っただけに違いない。

そこで、ソクラテスは、自分よりも「知恵のある人」をたずねて、最初は、政治家、次に、いろいろな作家、そして、最後には手に技能を持つ手工者たち、と、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を行なっていくわけである。それは、まるで「ヘラクレスの難行みたいなものだった」と、ソクラテス自身、回想しているものである。そして、その「難行の結果」として、ソクラテスは、次のような結論を出すことになるのである。つまり、私は、一般に、「知者」と思われているが、「……しかしじつさいは、諸君よ、おそらく、神だけがほんとうの知者なのかもしれないのです。そして、人間の知恵というようなものは、なにかもう、まるで価値のないものだと、神はこの神託のなかで言おうとしているのかもしれない。そして、わたしを一例にとつて、人間たちよ、おまえたちのうちでいちばん知恵のある者というのは、だれであれ、ソクラテスのように、自分は知恵に対してはじつさい何の値打ちもないのだということを知ったものが、それなのだ、言おうとしているもののようなのです。……」(23a～b)

むろん、このような結論だけでは、ソクラテス自身にとつて、何ら「決定的な事件」とはなり得なかつただろう。なぜなら、「自分の無知を知ることや人間の知恵などだけが知れていること、そして、神だけが真の知者である」というようなことは、ソクラテス自身にとつて、最初からわかりきっていたことであり、それをあらためて再確認しただけに過ぎないからである。それでは、一体、どのようなことが、ソクラテス自身の「頭の中」(或いは「心の中」)に起きたからこそ、まさに「決定的な事件」となり得たのだろうか。それは、次のようなことである。

つまり、最初は、自分よりも「知恵のある人」をたずねて、政治家をはじめ、いろいろな作家や手に技能を持つ手工者たち、その他、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を行なっていくうちに、ソクラテスは、知らないことは知らないとはつきりと自覚している自分のほうが、知らないのに知っていると思いついて世の知者たち

よりは、少しばかり「知恵」があるのかも知れないと思うようになり、その結果、例のデルポイの「神託のお告げ」は、どうもうそではなかったと認めざるを得ないと思いつながら、も、それでは、一体、神は、なぜ、「ソクラテスより知恵のあるものはだれもない」などということ、友人を介して、わざわざ自分に知らせてくるようなことをしたのだろうか、と、あれこれ考えているうちに、ソクラテスは、突然として、ある決定的な「想い」に襲われることになるわけである。それは、まさに「天雷」のごとく、ある日、ある時、ソクラテスの「脳裏」にどこからともなく突然として襲いかかってきたに違いない。

——「ああ、そうか!」、こうやって、毎日、「知恵があると思われる」人をたずねて、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行ないながら、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か知者でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはつきりと自覚させるような、そのような「行動（活動）」そのものが、そのまままさに「神からの絶対的な命令」であり、あの「デルポイの神託のお告げ」のもう一つの隠された真意なのだ、と。つまり、神は、私に、このような「行動（活動）」をさせるためにこそ、わざわざあのような「謎かけ」をしてきたに違いないと解釈するわけである。この時、ソクラテスは、はつきりと神の「謎かけ」の真意を理解したことになるわけである。つまり、これから自分がこの世でやるべき仕事とは、あるいは自分がこの世でやらなければならない仕事とは、まさにそのようなことであり、そして、これからの人生は、そうやって生きるという、「神からの絶対的な命令」なのだ、と、確信するようになるということである。

そして、そのような劇的な「内的事件」が、ソクラテスの「心の中」ではつきりと起きたからこそ、その後のソクラテスは、最初の段階における例の「神託に反駁する」ためではなく、今度は、「神からの絶対的な命令」という極めてはつきりとした使命感を持って、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる「広場」（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行き、そして、必要があれば、どのような分野のどのような人であれ、老若男女を問わず、人間の諸問題について、いろいろと「対話（吟味）活動」を行なつては、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か知者でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだということ、相手にはつきりと自覚させるようなことを、いわば毎日の「日課」のようにして、多年にわたって、活動をしていくことになるが、それが、すなわち、ソクラテスの「哲学遍歴」（つまり「哲学の実践」）ということになるわけである。

*

*

ソクラテスの「知的遍歴」

ソクラテスの「知的遍歴」について

晩年のソクラテスは、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる「広場」（市場）や街頭、その他、もういたるところで、いろいろな分野の人たちと親しく「対話（吟味）活動」を行なうことを、いわば毎日の「日課」のようにして過ごしていたわけだが、しかし、そのような「行動」が、若い時からずっと続いていたわけでもないだろう。

それでは、若い時の一〇代、二〇代は、ソクラテスという人は、一体、どのようにして過ごしていたのだろうか？ もちろん、これは推測になるが、恐らく、ホメロスの叙事詩を初めとして、様々な悲喜劇、当時、有名だったソフィストたち、また、いろいろな自然哲学、その他、そのような実に様々なものに「興味や関心」などを持って、いわゆる極めて旺盛な「知的遍歴」を積み重ねていたに違いない。

そして、この「極めて旺盛な」という言葉を軽く読み流さないように注意してほしいのです。なぜなら、尋常な、つまり、ふつう一般的な「知的遍歴」では、とても駄目だからである。それでは、一体、何がどう駄目なのかと言えば、それは、その人の「内的世界」を真に育て上げるためには、どうしても極めて旺盛な「知的遍歴」が絶対に必要不可欠だからである。それは、もう自分でも呆れるほどの、それは、もう自分でも全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」（知的好奇心）に襲われる時期なのである。そして、そここそは、まさに「神的な恋（エロス）」であり、それをプラトン風に言えば、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「イデア界」）の方へと想いを寄せて、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとする、そのようなもの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）であり、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることによってこそ、初めて、物事を極めて厳密に「認識（識別）」でき得るような真の「思考（思索）能力」が、しっかりと身につくことになるからである。

それゆえ、若い時のソクラテスも決して例外であったはずもなく、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経たことは、もうまったく疑いようがないものである。そうでなければ、後年のソクラテスという、アテナイ随一とも言うべき最も卓越した「思考（思索）能力」を持った人物となり得たはずもないからである。それゆえ、ソクラテスも、一〇代、二〇代、そして、三〇代の前半ぐらいまでは、まさに極めて旺盛な「知的遍歴」を積み重ねたことは、もうまったく疑いようがないものである。

それでは、その若い時期のソクラテスの行動範囲（特に対話相手）は、どのようなものだったのだろうか。恐らく、その中心となったものは、やはり親しい友人や仲間たちとの活発な対話（議論）であっただろう。また、機会が持てさえすれば、その当時の知識人たちとも積極的に対話（議論）を行なうこともあっただろうし、また、広場（市場）や街頭、その他などに出かけて行つては、そこでいろいろな人たちが、政治、文学、芸術、その他このことで、活発に対話（議論）をしている様子を非常に強い興味や関心を持って見聞きしたり、また、好んで自らもその対話（議論）などに加わったりしていたかも知れない。

ところで、ソクラテスは、当時のアテナイ人の青年たちが受けるような教育、例えば、音楽、体育、国文学などの教育を受けていたかという問題が残るかと思うが、恐らく、受けていたのだろう。また、いろいろな書物を読んだりすることもしていたのだろう。そうでなければ、なかなか前述のような「知的遍歴」を経ることは、非常に難しいことになる

からである。しかし、たとえ青年教育を受けていなくても、ソクラテスが若い時期に、いわゆる「知的遍歴」を経たことは、まったく疑いようがないものである。なぜなら、若い時期に、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を積み重ねなければ、われわれ人間の「知的能力」は、真に「成長・成熟」しないものであるとともに、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも深く厳密に探求でき得るような、そういう本格的な真の「思考（思索）能力」は、決して身につかないものだからである。

やがて、ソクラテスも三〇歳前後ぐらいになると、ソクラテスの「内的世界」もほぼでき上がって来るだろうから、この時期頃からは、後年のソクラテスらしい「対話（吟味）活動」が出てきて、それゆえ、ソクラテスと親しく対話（議論）をする人たちは、ソクラテスという人物に対して、それなりに一目置くようになってきていたのだろう。それでは、後年のソクラテスのような「対話（吟味）活動」は、一体、どのようにして得たかと言えば、それは、まさに若い時からの極めて旺盛な「知的遍歴」によるものなのである。

つまり、この時期には、誰でもいろいろな新しい「知識や考え方」などにふれたり、また、自ら積極的に学んでいく時期にあたるわけである。それゆえ、それに伴って、その人の「ものの見方、とらえ方、考え方」なども、どんどん「変化・成長」していき、いろいろな問題に対しても、最初は、ごく一般的な「考え方」だった状態から、やがてそれを否定して、自分なりの「答え」を出し、また、その「答え」を否定して、さらに新しい「答え」を出していくというように、ああでもないこうでもないといういろいろな角度から何度も何度も「自問自答」を無限に積み重ねながら、まさに「内的成長」をしていく時期にあたってはいるわけである。そのように何度も否定も肯定も吟味に吟味を積み重ねながら、だんだんと物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」の方へと近づけて行こうとする極めて旺盛な「知的遍歴」の結果であると言ってもよいだろう。

ちなみに、プラトンの若い時の「知的遍歴」であるが、それは、もう敢えて説明するまでもなく、当時のアテナイの青年たちが受けるような教育、例えば、音楽、体育、詩人の作品の暗唱、悲劇や喜劇の観劇、また、裁判や議会の見学、その他、そのような教育を十二分に受けていただけではなく、ソクラテスを初めとして、いろいろな分野の知識人たちの交流、また、プラトン自身、何らかの「興味や関心」を持った学問や芸術の、可能な限りのありとあらゆる書物を読みむさぼった人であっただろう。それは、もうプラトンの様々な「著作」のなかに出てくる数多くの「人物や思想」などを考え合わせてみれば、すぐに分かることである。敢えて言えば、プラトンこそは、当時までの傑出した人物たちの実に様々な「考えや思想」というものを、一度はプラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）で十分に消化し、厳密に「吟味（検討）」した上で、それらを数多くの「著作」の中に昇華し、今日まで伝えているアテナイ随一の「大思想家」の一人であるということである。それは、もちろん、アリストテレスの場合にも、全く同じことが言えるということである。

* * *

ソクラテスにとっての「知者」

ソクラテスにとっての「知者」

例えば、ソクラテスにとって、いわゆる「知者」とは、一体、どのような人のことを言うのかと問えば、それは、すなわち、「美にして善なるもの」を知ってそれを行なう人のことであり、それは、次のような人のことである。

つまり、「……彼は智と思慮とを区別することなく、ただ美にして善なるものを知ってこれを実行し、醜なるものを知ってこれを避ける者を、知者にして思慮ある人間と判断した。また重ねて、なすべきことを知っていながら、しかもその逆を行なう人間は賢にして克己心ある者と考えるかたずねられたとき、彼は言った。……無知放縦の人間をそう思わぬとおなじく、少しもそうだとと思わぬ。(中略)、私は、行ないの正しからざる者は智者でもなければ、思慮もない者と考えるのである。」(ソクラテスの「ソクラテスの思い出」3:9-5)

しかし、それは、おかしいじゃないかと思う人があるかも知れない。なぜなら、「……真の知者は、神だけであり、人間の知恵などはほとんど無に等しい」と、ソクラテス自身、その『弁明』のなかで公言しているからである。しかし、それは、全知全能の「神」に比べれば、われわれ一人ひとりの「知恵」などは、ほとんど無に等しいと言っているのである、われわれ人間の中の「知者」と「無知」との違いについては、クセノフォンは、次のような形で、ソクラテスの考え方を回想している。

「……彼は正義をはじめその他のすべての徳も智であると言った。なんとすれば、正しい行ないやその他すべて徳性によって行なわれる行為は、みな美にして善であるからであった。そして美にして善なるものを知る人々は、それを措いてほかのものをえらぶことは決してしないであろうし、またそれを知らぬ人々はそれを行なうことはできず、たとえ行なおうとしても失敗するのである。こうして、智者は美にして善なることを行なうが、智者ならざる者は行ない得ず、行なおうとしても失敗するのである。されば、正義およびその他一切の美にして善なることは徳によって行なわれるのであるから、正義およびその他一切の徳が智であることは明らかだというのであった。」(クセノフォンの「ソクラテスの思い出」)

*

*

つまり、個々の「徳(優れたもの)」には、例えば、「正義、勇氣、節制、善美、その他」があるが、それらすべてが、なぜ、「智」であるかと言えば、それは、「正義とは何か、勇氣とは何か、善とは何か、美とは何か、その他」、そういうものが厳密に「認識(識別)」できなければ、真に正義を行なうことも、真に勇氣を奮うことも、また、真に美にして善なることを行なうこともでき得ない。——つまり、「無知」の状態に留まる人たちは、正義でもないことを正義だと思い込んで、逆に不正なことを行なったり、また、勇氣でもないことを勇氣だと思い込んで、何か無謀で愚かな行動を試みたり、また、取るに足らないものを何か不相応に高く評価したり、あるいはそれほど価値のないものを、何か最上のもののように思い込んでしまうということである。

そして、そのような実に様々な誤った「判断や評価」(つまり無知に様々な思い違い)によつてこそ、自分に対しても、また、他人に対しても、あるいは社会や国家などに対しても、実に様々な不幸を生み出し、また、招いている最大の原因である、と、ソクラテスは、そう考えているのである。だからこそ、「無知」の状態に留まっている人たちは、自分の「無知」(つまり未だ「美にして善なるもの」を知らない状態であること)をはつき

りと自覚し、真に「内的成長」することによってこそ、今までのような本能に深く根ざした「価値観や道徳観」ではなく、より開かれた「価値観や道徳観」などを実践することによってこそ、ほんとうの意味での真の「知者」（或いは「賢者」）になるということである。それゆえ、ソクラテスは、最初から専門的な「知識」や世俗的な「知識」などをよく知っている人たちを、ほんとうの意味で真の「知者」（或いは「賢者」）などとは、少しも考えていなかったということこそ、何よりも大事な要点なのである。

それどころか、ソクラテスは、世の「物知りたち」（いわば「知者」）というのは、少しも「ものを考える」ということを行なっていないと、嘆きあきれているのである。だからこそ、ソクラテスは、その『弁明』のなかで、次のようなことを言うのである。——つまり、ソクラテスが「デルポイの神託」の真意をたずねて、政治家を初めとして、いろいろな分野の人たちと「対話（吟味）活動」を行なうわけだが、その過程で、ソクラテスは、次のようなことに気づくことになるのである。「……そして、アテナイ人諸君、諸君にはほんとうのことを言わなければならないのですから、誓って言いますが、わたしとしてはこういう経験をしたのです。つまり、名前のいちばんよく聞こえている人のほうが、神命によってしらべてみると、思慮の点ではまあ九分九厘まで、かえって最も多く欠けているとわたしには思えたのです。これに対して、つまらない身分の人のほうが、その点、むしろ立派に思えたのです。……」（『ソクラテスの弁明』22a）

*

*

さて、ソクラテスは、「……名前のいちばんよく聞こえている人たちのほうが、思慮の点では、かえって、一般の人たちよりも欠けている」というような「考え方」をしている。それは、一体、どういうことかと言え、それは、次のようなことである。——つまり、一般の人たちというのは、現実という大地にしっかりと根を下ろして生活をしている。そして、その現実の実に様々な「生活知」や「経験知」などを基にして、物事を考え、判断し、行動しようとしている。それゆえ、彼らは、現実_{に即した}「考え方」をしているのである。——一方、各分野の様々な「知識人」たちというのは、その各分野の実に様々な「専門知」や「学問知」などを基にして、物事を考え、判断し、行動しようとしている。それゆえ、彼らは、実に様々な「知識」（つまり「専門知」や「学問知」など）に即した「考え方」をしているのである。それは、それぞれの「分野」のなかでは「極めて有効」であるとしても、それぞれの「分野」を離れて、現実の複雑で生々しい「様々な問題」などに直面した時には、彼らの「思慮」（その時々_{の即座の}「判断力」）の点では、つまり、いざという時には、かえって、現実_{に即した}「考え方」をしている一般の人たちの方が、遙かに優れた「思慮」（その時々_{の即座の}「判断力」）を持っているということである。

例えば、ある「一つの専門」に特化しているような人たちというのは、それぞれの「分野」のなかでは「極めて有効」であるとしても、ひとたび、それぞれの「分野」を離れると、それぞれの「分野」以外では、かえって世間知らずの、ふつうの人（或いは「ふつうの人以下」）になってしまうということである。——一方、ソクラテスという人は、ある「一つの専門」に特化したような人（専門家）ではなかった。そうではなく、ソクラテスという人は、人間としての総合的な「内的成長（成熟）」を遂げていた人なのである。

それはともかく、世の「知者」（或いは「知識人」）たちは、例えば、「正義、勇気、節制、善美、その他」などに対しても、そんなことは、誰よりもよく知っていると思ひ込ん

でいるために、それらのことについて、今さら深く厳密に「吟味（検討）し直す」ことを怠るだけではなく、その厳密にはよく知らない「正義や勇氣」という言葉を頻繁に使っては、例えば、「……人間にとって何よりも正義や勇氣が大事である」などと、公言して憚らないという「無知」（つまり「醜態」≡美しくない行為）を演じてしまうのである。しかも、その人は、誰よりも「正義や勇氣」については、よく知っていると思いついて、そのように人の「無知」というのは、ふつうの人たちよりもさらに根が深く、いつまで経っても、「目が覚めない」ということにもなるのである。

つまり、世の「物知りたち」（いわば「知者」たち）は、自分は、すでにそのことについてはよく知っていると思いついて、いろいろな角度からあらためてそのことについてより厳密に「考え直してみる」というようなことを怠る傾向が非常に強いということである。——逆に、若しもあることについて自分は何も知らないと思いついて、かえって、その方が謙虚な気持ちになって、そのことについていろいろ調べたり、あるいは考えてみようという気持ちにもなるが、自分は、そのことについては、すでによく知っていると思いついて、そのことについて、「あらためて考え直してみる」ということを怠ってしまうだけではなく、それらについては、すでによく知っているという二重の「無知」に陥ってしまう危険性が高いということである。

だからこそ、ソクラテスは、同じような「題目」で飽きもせず何度も繰り返して繰り返し「対話（吟味）活動」を行なうわけだが、それには、次のような非常にはつきりとした理由があるからである。——つまり、ふつうの人たちは、その人なりに納得のいくような「答え」を得れば、それでも満足してしまい、そのことについて、「あらためて考え直す」ことを怠ってしまうだろう。しかし、ソクラテスは、それこそが最も危険なことだと考えているわけである。なぜなら、そのような中途半端な「答え」（判断）を持って、安易に「行動」（言動）するからこそ、実に様々な「不幸」を、自分に対しても、また、他人に対しても、あるいは社会や国家などに対しても招くことになるからである。つまり、「正義や勇氣、また、善や美、その他」などは、絶えずいろいろな角度から考えられ、何度も「吟味（検討）」されていなければ、その「生命」がみな死んでしまうようなものばかりだからである。それゆえ、ソクラテスが最も大事だと考えていたことは、あれこれの中途半端な「答え」などを得て、それでも満足して眠ってしまうようなことでは決してなく、むしろ、いろいろな角度から何度も「吟味（検討）」をどこまでも果てしなく無限に積み重ねるといって、まさにそのような「思考（思索）活動」そのものが、何よりも大事なものであり、それゆえ、硬直化した様々な中途半端な「答えや知識」などでは決してないということが、最も大事なことになるのである。

そして、そこにこそ、ソクラテスが、一生涯、貫いた「智を愛し求めてやまぬ」という言葉の真意があるのである。つまり、完全なる「智」は、「神」だけが所有しているのであり、われわれ人間の「知恵」（或いは「知識」）などは、みな不完全なものに過ぎないのである。だからこそ、遙か彼方にある「完全なる智」（つまり最究極の「真実、真理、その他」）などを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない姿こそ、まさに「愛知者」（つまり「哲学者」）の真の姿であるとともに、ソクラテスの場合、なぜ、「人間の諸問題」にあくまで固執したかと言えば、それは、言うまでもなく、われわれ人間にとって最も大事かつ最も切実な問題とは、当然のことながら、「自分をも含めた人間

の諸問題」にほかならず、その「人間の諸問題」について、絶えずいろいろな角度から「吟味（検討）」を無限にどこまでも積み重ねながら、より「よく生きること」「こそは、われわれ人間にとって最も「幸せ」なことである、と考えていたからである。

*

*

ソクラテスの「対話（吟味）活動」

ソクラテスの「対話（吟味）活動」について

例えば、ソクラテスは、政治家をはじめ、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ手
工者、その他、実にいろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうよ
うになるが、ソクラテスは、それを「ヘラクレスの難行」のようなものだったと回想して
いるわけである。その結果として、「……かれら（政治家や作家）は、けっこうなことを
いろいろとたくさん口では言うけれども……」、「……おそらく善美のことがらはなにも
知らないらしい」という結論になったということである。それでは、その「善美のことが
ら」とは、一体、どういうものかと問えば、それは、正義とは何か、勇気とは何か、美と
は何か、善とは何か、その他、そのようなものであるということである。

つまり、ソクラテスは、いろいろな分野の人たちと、例えば、正義とは何か、勇気とは
何か、あるいは人間にとって何が大事であるか、その他、そのような題目で、いろいろと
「対話（吟味）活動」を徹底的に行なってみたら、それに厳密に「答えられる」人間は、
誰もいなかったということである。——それは、ソクラテスにしてみれば、「正義とは何
か」を厳密に知らないとすれば、その人は、正義でもないことを何か正義だと思いついで、
逆に不正なことを行なったり、また、「勇気とは何か」を厳密に知らないとすれば、その
人は、勇気でもないことを何か勇気だと思いついで、かえって無謀で愚かなことを行なっ
てしまうということである。また、もし「人間にとって何が大事であるか」を厳密に知ら
ないとすれば、その人は、大事でもないことを何か大事なことだと思いついで、かえって
取るに足らない愚かな「行動」（言動）などを行なってしまうということである。

つまり、真に物事を厳密に思考（思索）でき得る「思考（思索）能力」がなければ、そ
の人は、物事を正しく判断することも、また、正しく行動することもでき得ず、どうして
も間違った「考えや判断、或いは価値観や人生観、その他」などを持って、実に様々な「行
動」（言動）などを行なうことになるが、その結果として、自分に対しても、また、他人
に対しても、あるいは社会や国家などに対しても、実に様々な「禍」（不幸）をもたらして
いる最大の「原因」（要因）であると考えていたということである。

つまり、大事なものは、あれこれの単なる専門的な「知識や技術」などではなく、むしろ
「何が正義であり、何が勇気であり、そして、何が人間にとって大事なことであるか」を
厳密に判断でき得る、そういう厳密な「思考（思索）能力」こそは、最も大事なものであ
り、それによってこそ、まさに「よりよい成果」（或いは「より悔いのない結果」）など
が、真に得られるようになるのである。そして、その人が行なう、そのような厳密な「思
考（思索）能力」こそは、その人のあらゆる「行動」（言動）の大元（源泉）となってい
くものであり、それゆえ、そのような厳密な「思考（思索）能力」を真に鍛え、育て上げ
ることこそは、何よりも大事なことになるとともに、そのための「方法」として、例えば、
ソクラテスが実際に行なっていた、いわゆる「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）
なども、その一つの「方法」として、有効であるということである。

*

*

「正義」システム

「正義」について

それでは、ここであらためて歴史上のソクラテスが、いったい「正義」というものをどのように考えていたかを再確認しておきたいと思う。それは、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』という著作のなかに出てくるものであり、それは、有名なソフィストのヒッピアスとソクラテスとが、まさに「正義の問題」で議論をするところがあるので、その部分を少し長くはなるが、引用してみたいと思う。

*

*

あるとき、エーリスのヒッピアスは久し振りにアテナイへ戻って来て、ちょうどソクラテスが二三の人を相手に話をしているところに出会ったのであるが、ソクラテスは折から、人に靴屋や大工あるいは鍛冶屋の仕事などを習わせようと思う時には、どこに習いにやるかということに当惑する者はないが、誰かが自ら正義を学ぼうと思ったり、あるいは息子に習わせようとしたりすると、さてどこへ行ったら師匠があるか、わからなくなるのは、じつに驚いたことだ、と話をしていた。

これをヒッピアスが聞いて、嘲笑の口調でもって言った。

「君は相変らずだね、ソクラテス、私が大昔に君から聞いた話とおなじ話をまだやっておるのか。」

するとソクラテスは言った。

「そうだ、しかももつと大変なことには、年びやく年中おなじことを言うばかりじゃない、年中おなじ題目について、話している。君は博学多才の人だから、たぶん同じ題目について決しておなじことなど言わないだろう。」

「そうさ。」(中略)

「それに、正義の問題について、私は、君でもほかの人でも決して反対のできぬことをいま言えると信じている。」(中略)

「しかし、私は決して君に聞かせないつもりだ。まず君の方から正義とは何であるか、意見を述べないうちは。なぜって、他人が笑いものにされただけでたくさんだからね。君はすべての人に質問をかけてぎりぎり調べあげるが、自分の方からは、説明もしなげりや、なんの意見も述べようとしないのだ。」(中略)

「それでは、こういうように言ったら気に入るかどうか。すなわち私は言う、法に適かなうすなわち正義であると。」

「法に適かなうことと正義とが、おなじものだと言うのか、ソクラテス。」

「そうだ。」(中略)

「しかし、法律というものは」とヒッピアスは言った。「大して真剣なものと考えerわけには行かない。そしてその遵奉じゆんぽうなどということもつまらぬものだ、第一、これを制定した人々が自らしばしばこれを破棄して変更を加えるんだ。」

「そうだ、そして」とソクラテスは言った。「国家はしばしば戦争を起しながら、再び講和を結ぶのだ。」

「それならば、法律は廃止されることがあるからというので、国法にしたがう人々を劣等視するのと、平和が結ばれるからというので、戦争において軍律を守る人々を咎とがめ立てするのと、どれだけ相違があると君は思うか。それとも君は、戦争の際、すすんで祖国の

ためにつくそうとする人々を、非難するのか。」

「いや、非難などしない。」

*

*

さて、引用が長くなつたが、しかし、ここまでの引用文のなかでも、歴史上のソクラテスが、いったいどういう人間であつたかがよく表れているかと思う。例えば、「……年がら年中おなじ題目で、話をしている」という言葉があるが、それは、なぜかと言えば、それには、次のようなはっきりとした理由があるからである。

例えば、われわれは、ある問題に対して、その人なりの「答えや結論」などを出せば、それでも満足してしまつて、あらためてその問題について徹底的に考え直すことをやめてしまふだろう。しかし、それこそが最も危険なことであり、そのような中途半端で誤つた「答え」（判断）を持つて「行動」（言動）するからこそ、自分に対して、また、他人に対しても、あるいは社会や国家などに対しても、実に様々な「禍」（不幸）をもたらしている最大の「要因」（原因）であると考へているのである。なぜなら、勇気でもないことを勇気だと思ひ込んで、何か無謀で愚かなことを行なつたり、また、正義でもないことを正義だと思ひ込んで、逆に、不正なことを行なつたり、あるいは取るに足りないようなものを、何か最上のもものように過大評価をしたり、その他、そのような誤つた「判断」、評価、価値観、人生観」などを持つて「行動」（言動）をするからこそ、自分に対しても、また、他人に対しても、あるいは社会や国家などに対しても、実に様々な「禍」（不幸）をもたらしている最大の「要因」（原因）であると考へているのである。しかも、「正義や勇気、善や美、その他」などは、どれもこれもあらゆる角度から絶えず厳密に「吟味（検討）」されていなければ、その「生命」が死んでしまふようなものばかりである。だからこそ、ソクラテスは、「年がら年中おなじ題目」で、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なつていたのである。つまり、何よりも大事なことは、あれこれの中途半端な「答えや結論」などではなく、むしろ、いろいろな角度から絶えず考へ続けてやまないという、そのような「思考（思索）活動」そのものが、何よりもまさに大事なことになるのである。

次に、話し相手のヒッピアースは、「……私は決して君に聞かせないつもりだ。まず君の方から正義とは何であるか、意見を述べないうちは、なぜって、他人が笑ひものにされただけでたくさんだからね。君はすべての人に質問をかけてぎりぎり調べあげることが、自分の方からは、解明もしなければ、なんの意見も述べようとしなくていいのだ」という言葉があるが、この部分も非常に興味深いものである。というのも、ソクラテスは、なぜ、自ら「正義とはこうである」ということを言うおうとしないのか？ それには、次のような非常につきりとした理由があるからである。

例えば、若い人に「正義とは何か」と問われた時に、「正義とはこうである」と答えれば、その若者は、その「答え」だけを受け取つて、自ら「正義とは何か」ということを少しも考へないことになるだろう。それでは、その若者の自らものを考へるといふ「思考（思索）能力」は、少しも育たないことになる。それゆゑ、ソクラテスは、まず、相手に「正義とはどういふものか」と答えさせ、その「答え」をお互いに様々な角度から徹底的に「吟味・検討」をし合ひ、その答えが「真知」ではないことを確認し合つては、次に、また、新しい「答え」を相手にさせては、それをまた、いろいろな角度から徹底的に「吟味・検

討」し合うことを何度も繰り返すことによって、だんだんと「完全なる知識」（つまり「真知」）の方向へと近づけていくことになるわけである。つまり、まだ「思考能力」の未熟な若者では、どうしても物事の表面的なところやある方向からしか物事をとらえることができないものだが、そのような「思考能力」の未熟な若者でも、ソクラテスのような人間と「正義とは何か」という問題で徹底的に「対話（吟味）活動」を積み重ねることによってこそ、次第にその若者は、そのソクラテスの巧みな「話術（問答）」に導かれて、その若者だけの「思考（思索）能力」だけではとてもそこまで深く入って行けないようなところまで、また、実にいろいろな角度から「物事をとらえ、考え深めていく」ことを、まさに身を以って学ぶことになり、それゆえ、その若者の「思考（思索）能力」は、間違いなく、次第に「成長・成熟」していくことになるわけである。それが、まさにソクラテスが実際に行なっていた有名な「産婆術」ということになるのである。

次に、ソクラテスは、「正義とは、法に適うことである」という答えを出しているが、この問題についても、少し考えてみたいと思う。まず、ソクラテス自身は、正義とは、まさに「国法」や「不文の法」（あらゆる国で、ひとしく信奉されているもの）を遵守することであるとしているが、一般に、「正義の問題」を考える場合には、大きく「社会的正義」と「個人的正義」とに分けて考えてみなければならぬ。そして、「社会的正義」というのは、その社会で一般的に「正しい（つまり正義）とされている」ものであり、それには「憲法、法律、宗教、慣習、その他」などがあるかと思う。一方、「個人的正義」とは、その人なりの「価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などから生じる、その人自身の「個人的正義観」ということになるわけである。それゆえ、「社会的正義」と「個人的正義」とは、何かにつけてぶつかり合うことが非常に多いかと思う。

例えば、その国家で「徴兵制」が行なわれていれば、それに従うのがまさに「社会的正義」であり、それに逆らうことは、その国家の「正義」に反することになり、それゆえ、何らかの「懲罰」を受けることになるかと思う。一方、それに対して、そもそも「徴兵制」そのものが間違っているのだと反論すれば、それが、その人の「個人的正義観」ということになるわけだ。つまり、「個人的正義」というのは、その人の「価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などによって、それぞれみな微妙に違ってくるものである。そして、歴史上のソクラテスが実際に行なっていた、「……他人から不正を受けることがあっても、自ら不正を行なうことをしない」というものこそは、まさに最も「成熟した道徳観」ということになるかと思う。それは、その人が真に「内的成長」を遂げて、その人の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）に全面的に支配されているような人間にだけ可能となる、いわば究極的な「道徳観」の一つなのである。逆に言えば、いくら真に「内的成長」していても、いわゆる「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などに振りまわされていたのでは、ソクラテスが実践していた最も「成熟した道徳観」とはなり得ないのである。そして、ソクラテスのような最も「成熟した道徳観」というのは、たとえ何か不正なことを行おうとしても、それができないということである。なぜなら、それは、例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）によって、それは、すなわち、ソクラテス自身の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）敢えて「内なる神」によって、絶えず禁止されてしまうからである。

もちろん、ソクラテス自身、生身の人間であるので、時には腹を立てたり、人を憎んだ

り、あるいは何らかの欲望などに襲われることも、当然、あったであろうが、それらは、ソクラテス自身の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）の支配によつて、すべてコントロールされていたことになるわけである。しかし、だからといって、ソクラテスは、決して「禁欲者」ではなかった。彼には妻子もあり、また、「……ご馳走があったときには、この人だけは、それをそっくり堪能することができた。ことに、べつに飲みたくなくても、たつてすすめられれば、盃をかさねて、しかも、だれよりも強かった」という。また、「……困苦に立ちむかう点についてであるが、この人は、ぼくだけでなく、ほかのだれよりもたちまさっていた。出征のさなかにはよくあることだが、われわれがどこかに孤立させられ、糧食（食料）にもこと欠く窮状におちいったばあい、ほかの連中は辛抱づよさという点ではからきしだめだった。（中略）、つぎに、冬の寒さに耐える強さという点であるが、それも、かの地の冬がたいへんなものだったから言うのだが、この人は、その点でも驚嘆すべき数々のふるまいをした。あるとき、なんともすさまじい寒波が襲来し、屋外に出る者は一人としてなかった。外出するさいには、だれも、びっくりするほどたくさん重ね着をし、靴をはき、さらにフェルトや羊の毛皮で足をくるみ込む始末だった。ところが驚いたことに、この人は、そういう状態のなかにありながら、あの、以前にいつも着ていた外套をひっかけて外に出、靴もはずかに氷の上を、靴をはいた他の連中よりもすたすと裸足で歩いたのだ。」（『饗宴』200A～B）

また、ソクラテスは、ある時、朝早くから翌朝の朝まで、ずつと立ったまま「思索」に耽つたことや、「……ある戦闘のあつた時に、味方のなかで、この人を除いてだれ一人として、ぼくを助けてくれる者はなかった。彼は、傷ついたぼくを見すてようとはせず、手をかしてくれ、ぼくをぼくの武器とともに無事救いだしてくれた」こと。さらに、「……わが軍がデリオンより退却したときのソクラテスも、けだし一見に値するものであった。（中略）、まず、その自若さにおいて、この人がいかにラケスにたちまさっていたことか、また、《肩を怒らし闊歩して、横目でぎよるりぎよるり見ながら》、落ちついてあたりの敵味方を見まわし見まわし、人々のあいだをすすんで行ったのだ。その姿は、だれかこの人に手出ししようものなら、こつびどく抵抗されるだろうことを、遠目にも明らかにしていた。だから、この人も、その戦友も、戦線から無事に離脱することになったのだ。」（『饗宴』220A～22）、その他、そのようなソクラテスを根底から支えていたものは、いったい何かと問えば、それは、やはりソクラテスの「理知的部分」の働きということになるのだろう。この問題は、次のところでも合わせて考えてみたいと思う。

*

*

『国家』編の主題は何か

『国家』編の主題は何か

例えば、『国家』編の主題は、果たして「正義」の方にあるのか、それとも「国家」の方にあるのが、なぜか遠い昔から議論の対象になっていたそうであるが、しかし、この問題は、それほど難しい問題ではないだろうと思う。というのも、「正義」の問題というのは本来、ソクラテス自身の問題であり、それゆえ、もともとプラトン自身の問題ではないということである。

一方、「国家」（理想国家）の問題は、確かに、ソクラテス自身の問題でもあるが、しかし、それ以上に、遙かに、プラトン自身にとっての「最大の関心事」（大問題）であったわけである。それは、次のような「書簡」からも、はっきりと証明できるものである。つまり、プラトンの『第七書簡』のなかで、「……わたしも、かつて若き日には、多くの人たちと同じような気持をもちました。自分のことが左右できるようになり次第、ただちに国家の公共活動に従事したいと、そう考えたわけです。……」。しかし、現実の様々な政変や憤懣やる方ない数多くの事件、また、世相の荒廃した混乱ぶりなどを見るにつけて、「……わたしは、初めのうちこそ、公共の実際活動へのあふれる意欲で胸いっぱいでありましたのに、そういうことどもに思いをいたし、ものごとが支離滅裂に引きまわされているありさまを見るにおよんでは、とうとう眩暈を覚えざるをえなくなったのです。それでわたしは、まさにそういうことどもについてはもちろん、国政全体についても、どうすれば改善しうるであろうかと検討するのをやめたりはしなかったものの、しかし実際行動に出ることについては、好機を期して、ずっと控えているよりほかなかったのです。（省略）、そして、あれこれ何年も熟考した結果として、プラトンは、やがて、「……国事も、個人生活も、およそその正しいありようというものは、哲学からでなくしては見定められるものでないと、正しい意味での哲学をたたえながら、言明せざるをえなくなったのでした。要するに、〈正しい意味において真に哲学しているような部類の人たちが、政治的支配の地位につくか、それとも現に国々において政治的権力をもっているような部類の人たちが、真に哲学するようになるかの、いずれかが実現されないかぎりには、人間のよろもろの種族が、禍から免れることはあるまい〉と。……」（324～326b）

さて、長い引用になったが、しかし、ここにこそ、プラトン自身の思いがはっきりと明言されているのである。つまり、プラトンは、若い頃は、「政治家」になることを考えていたのである。それゆえ、「……いかにどうすれば、国家をよくすることができるか」が、プラトン自身にとっての最大の関心事であったとともに、その「答え」を若い時からずっと探し求めているということである。そして、その「答え」は、上述の『第七書簡』のなかで、「……要するに、〈正しい意味において真に哲学しているような部類の人たちが、政治的支配の地位につくか、それとも現に国々において政治的権力をもっているような部類の人たちが、真に哲学するようになるかの、いずれかが実現されないかぎりには、人間のよろもろの種族が、禍から免れることはあるまい〉という形で、そのいわば「最究極の答え」を遂に得たことになる。そして、その「最究極の答え」を『国家』編という著作のなかで、膨大な「時間と労力」とを費やして書き上げたということである。

つまり、プラトンの数多くの「初期作品」のなかに出てくる「題目（テーマ）」である、例えば、「敬神とは何か、勇氣とは何か、正義とは何か、徳とは何か、美とは何か、その

他」などは、すべて歴史上のソクラテス自身にとっての関心事であり、それゆえ、もともとプラトン自身の最大の関心事ではなかったことである。それでは、プラトンは、なぜ、ソクラテスを主人公とした数多くの「初期作品」を書いたのかと言えば、それは、それぞれの「題目(テーマ)」について、ひと通り考えてみたかったのと同時に、もう一つの大きな理由は、まだ若いプラトンにとってソクラテスという人物は、極めて「魅力と謎(若いプラトンにはまだ理解できない部分)」とに満ち満ちていたわけだが、そのソクラテスという人間を徹底的に理解したいがために、プラトンは、何年も何十年もかけて、自らソクラテスとなつて、そのソクラテスの「内的世界」(特にその「思惟界」)を徹底的に生きてみることになるわけである。その結果として、若い時にはなかなか理解できなかったソクラテスという人間の最も奥深くに内在していたであろうその「中心核」が、はっきりと見えて来たということである。

そこで、プラトンは、「中期著作」のなかで、ソクラテスに関する「三つの難題」に決着をつけるとともに、プラトン自身の最大の関心事であった「国家」についても徹底的に考えてみるわけである。だからこそ、あれほど膨大な「書物」になったのである。これほど膨大なページ数を持つのは、もう一つ、最晩年の『法律』編だけである。だとすれば、それだけ膨大な「時間と労力」とを降り注いで書かれたその『国家』編と『法律』編こそは、まさにプラトン自身の最大の関心事であったことは、もうまったく疑いようがないのではないか。——というのも、プラトン自身、国家が滅びる、或いは「……社会が混乱し、腐敗、墮落する」ということが、そこに住む人たちにとって、どれほど不幸で悲惨なことであるかを、まさにわが身をもって実感していたからであろう。だからこそ、そのようなことのない「理想国家」というものを誰よりも真剣に考えたわけである。その結果として、プラトンは、膨大なページ数と全精力とを降り注いで、いわゆる『国家』編と『法律』編(未完)とを書き上げることになったということである。

つまり、何度も言うように、プラトンにとつての最大の関心事は、一体、何であったかと問えば、それは、まさに「国家の問題」であるとともに、それでは、一体、どのような「人物」(つまり「政治家」)が国家を統治すれば、真に優れた「国家」になり得るか、徹底的に考えた末に、まさに次のような「最究極的な答え」を得るわけである。それは、プラトン自身の言葉で言えば、前述の、「……要するに、正しい意味において真に哲学しているような部類の人たちが、政治的支配の地位につくか、それとも現に国々において政治的権力をもっているような部類の人たちが、真に哲学するようになるかの、いずれかが実現されないかぎりには、人間のあらゆる種族が、禍わざはひから免れることはあるまい」ということであり、そして、その真の「哲学者」というのは、すなわち、「……哲学者とは、つねに恒常不変のあり方を保つもの(イデア)に触れることのできる人々のことであり、他方、そうすることができずに、さまざまに変転する雑多な事物のなかにさまよう人々は哲学者ではない。……」(『国家』484b)ということになるわけである。

また、プラトンは、なぜ「アカデメイア」(学園)という学校を始めたかと言えば、それは、何も数学者や天文学者などを育てるためではなく、まさに真に優れた「政治家」(統治者)を真の意味で育てたいがためだったのである。もちろん、「国家」の問題は、ソクラテス自身の問題でもあったが、しかし、それ以上に、遙かにプラトン自身の「最大の関心事」であったということである。つまり、歴史上のソクラテスにとつての「最大の関心事」

事」は、一体、何だったかと問えば、それこそ、まさに「正義の問題」（或いは「善美の問題」）であり、それは、彼自身の、「……自分は生涯をただ正義と不正とを考究することと、正義を行ない不正を避けることについてやして来たのであって、これが弁明のもつとも見事な準備と信じる……」という言葉からもはっきりと分かるとともに、もう一方の、プラトンにとつての「最大の関心事」は、一体、何だったかと問えば、それこそ、まさに「国家の問題」になるということである。そして、プラトンは、この二つの「大問題」を、いわゆる『国家』編という著作のなかで徹底的に考察し、解決しようとして書き上げたことになるといふことである。

*

*

「正義と不正」

「正義と不正」について

ところで、プラトンは、その『国家』編（第二巻）のなかで、「正義と不正」については、かなり徹底的な議論を行なっているので、その「問題」についても、できるだけ詳しく考えてみたいと思う。

まず、当時、一般的に考えられていた「正義」の起源については、次のように語っている。つまり、「……自然本来のあり方からいえば、人に不正を加えることは善（利）、自分が不正を受けることは悪（害）であるが、ただどちらかといえば、自分が不正を受けることによってこうむる悪（害）のほうが、人に不正を加えることによって得る善（利）よりも大きい。そこで、人間たちがお互いに不正を加えたり受けたりし合って、その両方を経験してみると、一方を避け他方を得るだけの力のない連中は、不正を加えることも受けることもないように互いに契約を結んでおくのが、得策であると考えられるようになる。このことからして、人々は法律を制定し、お互いの間の契約を結ぶということを始めた。そして法の命じる事柄を『合法的』であり『正しいこと』であると呼ぶようになった。これが、すなわち、〈正義〉なるものの起源であり、その本性である。つまり〈正義〉とは、不正をはたらきながら罰を受けないという最善のことで、不正な仕打ちを受けながら仕返しをする能力がないという最悪のこととの、中間的な妥協なのである。……」（358E～359A）

例えば、これは、ホッブズの『リバイアサン』（国家論）のなかに出てくる基本的な「考え方」に似たところがあるかと思う。つまり、「……われわれ人間は、自然状態（無法状態）では、お互い自分が欲するままに行動するために、様々な利害の対立や衝突が絶えず起こるといって、いわゆる『万人の万人に対する戦い』の状態になってしまう。ここでは、ありとあらゆる『不正』（例えば、殺人、強盗、窃盗、暴行、傷害、強姦、その他）が何のためらいもなく、毎日のように休みなく起こり、そのために、そこに住む人たちは、一時たりとも安心して生活ができない状態になってしまう。そこで、お互いの『財産や身の安全』などを確保するためにも、お互いに契約を結ぶことになる。それが、すなわち、『社会契約』（法律の制定）であり、それを『国家』の手に委ねる」という考え方である。

ところで、正しい人と不正な人との間には、何か根本的な違いがあるのだろうか？ この問題を考える上で、次のような例をプラトンは、取り上げている。つまり、「……正しい人と不正な人のそれぞれに、何でも望むがままのことができる自由を与えてやるわけです。そのうえで二人のあとをつけて行って、両者それぞれが欲望によってどこへ導かれるかを観察すればよい。そうすれば、正しい人が欲心（分をおかすこと）に駆られて、不正な人とまったく同じところへと赴いて行く現場を、われわれははつきり見ることができましょう。すべて自然状態にあるものは、この欲心こそ善きものとして追求するのが本来のあり方なのであって、ただそれが、法の力でむりやりに平等の尊重へと、わきへ逸らされているにすぎないのです。……」

例えば、「……かりに次のような指輪（それは、指輪の玉受けを内側に回すと自分の姿が消え、そして、その玉受けを元の位置に戻せば、再び、自分の姿が現われるという、いわば〈透明人間になれる指輪〉）が、二つあったとして、その一つを正しい人が、他の一つを不正な人が、はめるとしてみましょう。それでもなお正義のうちにとどまって、あくまで他人のものを手をつけずに控えているほど、鋼鉄のように志操堅固な者など、ひとり

もいまいと思われましょう。市場から何でも好きなものを、何おそれることもなく取って
くることができるし、家に入りこんで、誰とでも好きな者と交わることもできるし、これ
と思う人々を殺したり、縛めから解放したりすることもできるし、その他何ごとにつけ
ても、人間たちのなかで神さまのように振舞えるというのに！——こういう行為にかけ
ては、正しい人のすることは、不正な人のすることと何ら異なるところがなく、両者とも
同じ事柄へ赴くことでしょう。(中略)、つまり、〈正義〉とは当人にとって個人的には善
いものではない、と考えられているのだ。げんに誰しも、自分が不正をはたらくことがで
きると思つた場合には、きつと不正をはたらくのだからと。……」(36B～C)

これは、非常に興味深い「意見」(考え方)だと思ふ。なぜなら、われわれ人間のほと
んどの人たちが、「まさにその通り」であると考えているからである。つまり、正しい人
と不正な人との間には、根本的な違いなどは何ひとつなく、その証拠に、何でもしたい放
題の自由を与えてやれば、正しい人も不正な人もまったく関係なく、われわれ人間は、ま
さにその人の欲望の赴くままに行動するに違いないと考えているからである。つまり、「…
：一般には、みずからすすんで正しい人間であろうとする者など一人もいないのだ。ただ
勇気がなかったり、年を取っていたり、その他何らかの弱さをもっていたりするために、
不正行為を非難するけれども、それは要するに、不正をはたらくだけの力が自分にないか
らなのだ。ということ」を、これがありのままの事実だということは、明白です。なにしろ、
そういうふうには不正を非難している連中は、ひとたび力を獲得するや、たちまち誰よりも
先に、できるかぎりの不正をはたらくのですから。……」(36C～D)

つまり、われわれ人間は、もともと「欲望の塊」であり、その「欲望や感情」の赴くま
まに「行動」(言動)したい衝動に絶えずかられているながらも、様々な「社会的制約」の
ために抑えつけられているだけであり、自ら進んで何一つ不正を働かないような正しい人
間であろうとする者など、一人もいないのだ、という「考え方」である。——この「考え
方」は、われわれ人間の本能に深く根ざした「価値観や道徳観」であるので、今日でも、
「まさにその通りである」という極めて多くの賛同が得られるだろうし、また、誰でも、
その賛同は、もつともなことであると考えるに違いない。

ところが、ソクラテス、シャカ、そして、キリストなどの出現によつて、今までのわれ
われ人間の本能に深く根ざした「価値観や道徳観」とは根本から違つた、もう一つの「価
値観や道徳観」を主張するようになるわけである。これは当時としては、極めて理解しが
たいものだったに違いない。というのも、多くの大衆の支持を得たということと、その思
想が真に理解されていたかどうかは、まったく別の問題になるからである。むしろ、今日
でも、たとえ「頭の中」(或いは「心の中」)では理解でき得ても、その「価値観や道徳
観」を日々の生活のなかで実践できる人など、ほとんど誰もいまいと言えるものである。
それは、なぜかと言えば、それは、言うまでもなく、われわれ人間の「本能や本性」に明
らかに逆らうものだからである。例えば、ソクラテスという人は、その『ゴルギアス』と
いう著作のなかで、「……他人に不正を加えるよりも、自分が不正を受けるほうをえらぶ」
ということを言っているが、これは明らかに、われわれ人間の本能に深く根ざした「価値
観や道徳観」に反するものである。

また、『聖書』のなかにも、「……あなた達は、目には目を、歯には歯を」と命じら
れたことを聞いたであろう。しかしわたしはあなた達に言う、悪人に手向かつてはならな

い。だれかがあなたの右の頬を打ったら、左をも向けよ。訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせてやれ。だれかが無理に一ミリオン行かせようとするとするなら、一しよに一ミリオン行つてやれ。求める者には与えよ。借りようとするとする者を断るな。また、「…：あなた達は、〃隣の人を愛し、敵を憎まねばならない」と命じられたことを聞いたであろう。しかしわたしはあなた達に言う、敵を愛せよ。自分を迫害する者のために祈れ。あなた達が天の父上の子であることを示すためである。父上は悪人の上にも善人の上にも日をのぼらせ、正しい人にも正しくない人にも、雨をお降らしになるのだから。自分を愛する者を愛したからとて、なんの褒美があるろう。人でなし税金取りでも同じことをするではないか。また兄弟だけに親しくしたからとて、なんの特別なことをしたのだろう。異教人でも同じことをするではないか。あなた達は、天の父上が完全であられるように、完全になれ。」その他、もちろん、これらは、明らかにわれわれ人間の「本能や本性」にまっこうから逆らうものである。

それでは、なぜ、そのようなわれわれ人間の「本能や本性」に明らかに逆らうことを、敢えて主張したのだろうか。また、それは、そもそも、一体、どのような「心の状態」からそのようなことを主張したのかと言え、それは、むろん、ふつうの「心の状態」からは、なかなか生まれ来て来ない「考え方」なのである。それは、富士山で言えば、五合目から頂上へと向かっていく時に経験する様々な不可思議な「内的成長」を経て、いわゆる真に「内的成長」をした「心の状態」から生まれて来るものである。つまり、真に「内的成長」することによってこそ、初めて、得られる「考え方」なのである。それでは、なぜ、真に「内的成長」すると、そのような「考え方」が生じて来るのだろうか。それは、富士山で言えば、五合目から頂上へと向かって登って行き、そして、真に「内的成長」するためには、どうしても何よりも「真実・真理」（つまり「真善美」）などを愛し求め続けることが必要不可欠になって来るわけである。その時に、ほとんどの場合、例えば、人間とは何か、どう生きたらよいのか、自分とは何か、また、善とは、悪とは、生とは、死とは、その他、そのような様々な「根本的な問題」にばったりとぶつかることになり、それを何とか解明したいと思うわけである。その場合、ソクラテス、シャカ、そして、キリストと言った人たちは、まさにそういう人間に関する様々な「根本的な問題」を誰よりも徹底的にとことん考え深めた人たちであり、その結果としての、いわば彼らなりの「答え」ということになるのだろう。

それでは、真に「内的成長」することによって、いったい何がどう変わるのかという問題について、もう一度、ここで再確認しておきたいと思う。

まず、根底からの「自己改革」が、なぜ起こるのか言えば、それは、真に「内的成長」するためには、どうしても「真実・真理」（つまり「真善美」）などをどこまでも愛し求め続けることが必要不可欠であり、それゆえ、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを何とかとらえようと、真剣に「思考（思索）活動」を何年も果てしなく積み重ねていくうちに、今までのような中途半端な「考えや判断」しかできなかった未熟な「思考（思索）能力」から、次第に人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをより深く厳密にとらえられるような、そういう本格的な「思考（思索）活動」へと真に鍛えられ、育て上げられることとなり、そして、最終的に、真に「内的成長」を遂げることによってこそ、その人の「思考（思索）能力」というものは、一段階ハイレ

ベルのものになるということであり、それは、「心の眼」が開けることによつて、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも深く厳密に探求でき得るようになるとともに、真に「叡知」が働き始めることによつて、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。

また、われわれ人間の「本能」に深く根ざした「価値観や道徳観」から、なぜ、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行するのだろうか？ それは、富士山で言えば、五合目から頂上へと向かつていく時には、いわゆる「虚無の世界」を孤独深く彷徨さまよっているような状態になるが、それは、一体、どのような世界かと言えば、それは、あれこれ物事を深く考える本格的な「思考（思索）活動」を何年も積み重ねていくうちに、その人が、子供の頃から、その「社会環境」のなかで自然と身につけてきた「価値観や道徳観」に対しても、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それではこうなのかと何度も「考え方」を新たにしていこううちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまつて、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界（それがすなわち「虚無の世界」）であるが、そのような世界に深く陥おちつてしまうわけである。そして、そういうばらばらになつてしまつた「価値観や道徳観」などを、もう一度、あらためて深く考え直してみる時に、今までのような本能に深く根ざした「価値観や道徳観」ではなく、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを土台とした「価値観や道徳観」へと、その人の「心の中」で自然と再構築されているということである。

それは、その人が意識的にそうするというよりも、むしろなぜかそういうふうになつていくというのが、まさに「実感」なのである。ここに、「内的成長」の一つの不思議さと神秘さがあるのかも知れない。というのも、自分が意識的に考え出した「価値観や道徳観」などであれば、当然、自分でその「価値観や道徳観」をうち消すことができ得るだろう。ところが、自分で意識的に考え出した「価値観や道徳観」などではなく、それは、富士山で言えば、五合目から頂上へと向かつて登つていき、そして、ついに「内的成長」するまでの間に、知らず識らずのうちに、その人の「心の中」で今までの「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行しているのである。それゆえ、「いちばん驚いているのは、誰でもないその人自身なのである」。——というのも、今まではあれほど「目先の欲や目先の快楽」などを他人よりも少しでも多くむさぼることが、われわれ人間にとつて最も幸せなことであると考えていたような人が、いわゆる真に「内的成長」することによつて、その「考え方」が大きく変わつてしまい、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行することになるからである。

例えば、古代末期の神学者アウグスティヌスという人は、一方では、「真理の光」を強く愛し求めながらも、もう一方では、「淫欲で自堕落な生活」からどうしても抜けきれなかった人であつたが、ある日、ある時、あるきっかけから、彼の「心の中」ではつきりと「回心」が生じたという有名な話が残っているわけである。しかも、ここで最も大事なことは、その「回心」というものは、その人が、例えば、「今までは、いろいろと悪いことばかりをしてきたから、これからは、心を入れ替えて、正しい人間になろう」という、そういうその人の「頭の中」であれこれ意識的に考へて、そうするというのは、まったく全然違うものである。もしそういう意識的なものであるならば、やがて、その人は、もと

通りの自堕落な人間に戻ってしまうだろう。しかし、真に「回心する」というのは、そういうのとはまったく違って、まさに「神と完全に一体となる」ということであり、それは、一般には「宗教的な生活」や『聖書』などを深く読むような長い歳月を積み重ねていくうちに、次第に「神の言葉」が、その人の中に深く溶け込んできては、終には「その神と完全に一体となった瞬間」こそは、まさに「回心」の決定的瞬間になるわけである。そして、そのような「内的状態」ともなれば、自ずとその人の「心の中」では、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行しているものであり、しかも、その決定的瞬間は、まさに「あっ！」という感じで、ある日、ある時、本人にもまったく思いがけないような感じで突然に襲って来るものなのである。ここに、まさに「回心」や「開悟」というようなものの不可思議な一面があるのかも知れない。

*

*

話が大きくそれてしまったので、ここで本来の「正義と不正」の問題にもどりたいと思うが、プラトンは、「不正の極致」については、その『国家』編の「登場人物」（グラウコン）に、次のように言わせている。つまり、「……もし極度に不正な人間であるべきならば、いろいろの不正事を企てるにあたって誤ることなく、人目をくらすようではなければなりません。発覚して捕らえられるような者は、へまなやつだと考えるべきです。なぜなら不正の極致とは、実際には正しい人間ではないのに、正しい人間だと思われることなのですから。（中略）、つまり——最大の悪事をはたらきながら、正義にかけては最大の評判を、自分のために確保できる人であると考えなければなりません。そして万一何かしくじるようなことがあっても、その取り返しをつける能力をもっていると考えなければなりません。すなわち、自分がおかした不正の何かがあばかれた場合には、人を説得しおこせるだけの弁論の能力をもち、力づくで抑えなければならぬ場合には、自分の勇氣とたくましさにより、また味方と金を用意することにより、相手を抑えつけるだけの実力をもっている者と考えなければなりません。……」

次に、「正義の極致」として、プラトンは、次のように考えます。それは、「……善き人と思われ、ことではなく、善き人であることを望むような人間、——議論のなかで並べて置いてみましょう。正しい人間からは、この〈思われる〉を取り去らなければなりません。なぜなら、もしも正しい人間だと思われようものなら、その評判のためにさまざまの名誉や褒美が彼に与えられることになるでしょう。そうすると、彼が正しい人であるのは〈正義〉そのもののためなのか、それともそういった褒美や名誉のためなのか、はっきりしなくなるからです。こうして一切のものを剥ぎとって裸にし、ただ〈正義〉だけを残してやって、先に想定した人間と正反対の状態に置かねばなりません。すなわち、何ひとつ不正をはたらかないのに、不正であるという最大の評判を受けさせるのです。そうすれば彼は、悪評や、悪評のもたらささまな結果のためにへなへならないということによって、その〈正義〉のほどが完全に吟味されることになるでしょう。……」

引用が長くなってしまったが、それは、プラトンが、いかにこの「問題」について、徹底的に考えようとしているかを理解してもらいたいからである。というのも、この「正義と不正」という問題は、われわれ人間にとっては、恐らく、半永久的な問題の一つであり続けるだろうと思うからである。そして、誰もが必ず一度は自問自答することになるのは、「……あれこれの不正を何ひとつ働かないようにするために、われわれの心の底から絶え

ず生じてくる、ああしたい、こうしたい、また、あれもほしい、これもほしいという、そういう様々な本能的な『欲望や感情』などを無理やり抑えつけながら、一生涯、ただ正しくつつましく生きること、一体、どんな『得』(益)があるのだろうか? —— 現に、正しくも無力で貧乏な人間に対しては、世間はその人が善人であることは認めながらも、心の中ではその人を見下し、軽蔑しようとしているではないか。むしろ、欲望の赴くままに行動して、他人よりも少しでも多くの欲望をむさぼった方が、遙かに幸せなことではないか! —— という大きな疑問にぶつかることになるわけである。

そこで、ソクラテスも、ほとほと返答に窮した挙げ句、その打開策として、「個人の正義」よりもっと大きな「国家の正義」について考えた方が、より分かりやすいだろうと提案をして、「国家」の問題へと話題を変えてしまうのである。

その後、プラトンは、われわれ人間の「魂」には三種類あるという話をするようになるが、それは、「欲望的部分」と「気概(激情)部分」それに「理知的部分」であり、そして、国家においては、知恵を持つ「理知的部分」の人たちが、国家を統治し、そして、勇気を持つ「気概(激情)的部分」の人たちが、国を守る仕事に従事し、そして、様々な欲望を持つ「欲望的部分」の人たちが、生産的な活動に従事するのが、最も正しいこと(つまり「正義の状態」)であり、逆に、「欲望的部分」の人たちや「気概(激情)的部分」の人たちが、国家を統治するような状態は、決して正しいことではない(つまり「不正の状態」)であると、プラトンは、考えているわけである。

それは、個人においても、全く同じことであり、「理知的部分」が、その人を支配しているような状態こそは、最も正しい状態(つまり「正義の状態」)であり、逆に、「欲望的部分」や「気概(激情)的部分」などがその人を支配しているような状態は、決して正しい状態ではない(つまり「不正の状態」)であると考えているわけである。

例えば、「理知的部分」と「気概(激情)的部分」とが協力をして、いわゆる「欲望的部分」をコントロールできているような状態こそ、まさに「節制」ができている状態と呼ばれ、逆に、そのコントロールができずに、「欲望的部分」が支配権を持っているような状態こそは、まさに「放縦」(或いは「放埒」^{ほうらつ})の状態と呼ばれるものである。

また、「理知的部分」からの「指示」(正しい指示)に従って、いわゆる「気概(激情)的部分」が、たとえ様々な「困難や苦難」などに直面しようとも、積極果敢に行動したり、また、じっと耐え忍んでいる状態こそ、まさに「勇氣」ある人間と呼ばれ、逆に、「理知的部分」からの「指示」(正しい指示)に従わず、何か無謀で愚かな行動などを行っているような状態こそは、まさに「蛮勇」(或いは「愚勇」と呼ばれることになるのである)。

その場合、たとえ「理知的部分」に支配されていても、その「理知的部分」が正しい「考えや判断」などができないような状態であれば、それは、まさに「無知」の状態であるが、そのような「無知」の状態では、その人をあれこれ混乱させるばかりである。それゆえ、そのような「無知」から解放されるためにも、どうしても様々な「教育や学習」というものが、必要不可欠になって来るといふことである。それは、国家においても、まったく同じことであり、そのような「無知」の状態にある人たちが、国家を統治するような時には、その国家は、大変な混乱を招くことになり、それゆえ、国家を統治するような人たちは、ありとあらゆる面に真に優れた人たちでなければならず、そのためにも、プラトンは、いわゆる「生涯教育」というものを考え、そして、最終的には「善のイデア」を観て取った

人間たちこそが、まさに国家を統治すべきであると考えるわけである。

* *
そのように、プラトンは、最終的には「善のイデア」という考え方を持ち出すことによって、いわゆる「人間の諸問題」について、まさに「根底（根源）」からの決着をつけることになるかと思う。——それは、まず、数学的諸学科「算数、平面幾何学、立体幾何学、天文学（天体力学）、音楽理論、その他」などを本格的に学ぶことによって、その人の「魂の眼」を上の方へと十分に上昇させてから、いわゆる本格的な「哲学的問答法」によってこそ、最終的には「善のイデア」を窺て取ることができ得るとともに、真に「内的成長（成熟）」することもでき得るということである。そして、真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行することになるが、しかし、それは、その人自身にとっても、なぜ、そうなったのか、よく分からないということが最も大事な点であり、それゆえ、「いちばん驚いているのは、誰でもない、その人自身なのである」。しかも、その人の「心の中」では、或る「エネルギー」が躍動し始めるわけだが、その「エネルギー」こそは、まさに真の「愛」なのである。そして、その「巨大なエネルギー源」は、その人をして尋常ならぬ活動へとかり立てるものだが、それは、なぜかと言えば、それは、月並みなものや中途半端なものなどでは、もう心の底から満足できないような精神になっているからである。そして、その「精神」は、確かに「様々な欲望」（目先の欲や目先の快樂）への思いもなお残ってはいるが、しかし、何よりも物事の「真実・真理」（すなわち「真善美」）を愛し求めてやまないような精神なのである。それが、ソクラテス、プラトン、シャカ、孔子、そして、キリスト、その他、古今東西の真に優れた人たちのすべての人たちが共有した「精神構造」なのである。そして、その開かれた「心の眼」は、曖昧なものやいい加減なものなどを相入れられないような、そういう何よりも物事の「真実・真理」（すなわち「真善美」）を愛し求めて、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまないような「精神」（「純粹自己」）となり、そこからこそ、何か真に優れた人類的な「発明、発見、創造」、行動、その他」などが生み出されることになる。その人は、その人自身（つまり「本来の自分自身」となって、最も充実した時を過ごしていることにもなるわけである。しかも、その「精神」が真に志向している方向とは、すなわち、「様々な欲望」（目先の欲や目先の快樂）などの方向ではなく、むしろ限らない「前進と進歩と歓喜と創造」への方向なのである。ただ、「肉体」があるために、様々な「欲望」への思いはなお根強く残ってはいるが、しかし、その開かれた「精神」そのものは、本来、何よりも「真善美」を愛し求めてやまないようなものであるとともに、限らない「前進と進歩と歓喜と創造」への方向に向かっているということである。

*

*

「参考文献」

- ※底本 「世界の名著 プラトンⅠⅡ」(「中央公論社」)
- ※底本 「国家」上下 プラトン著・藤沢令夫訳(「岩波文庫」)
- ※底本 「ソークラテースの思い出」佐々木理訳(「岩波文庫」)
- ※底本 「福音書」塚本虎二訳(「岩波文庫」)